

入選

テーマ：やさしさと社会、そしてわたし 「世界の見方の変化」

茨城県立太田第一高等学校3年 山内春奈

わたしの見ていた「世界」。それは表面的なものだった。看護師を目指すようになった理由も、ある時見た看護師の姿に憧れを抱いたからという、浅はかなものだった。一日看護師体験には、看護の職業への理解を深める為、そして将来に役立つ経験ができればと考え参加した。

看護体験では、まず看護師の、患者さんに対する意識を学んだ。担当の看護師に言われた言葉、「患者さんのお世話をしてあげるのはではなく、お手伝いをさせていただく立場」が強く印象に残っている。わたしも決して「お世話をしてあげる」と考えていた訳ではなかったが、改めてその心がけに触れることができた。そして一日中患者さんと接したり、医療の現場を体験したりすることで、看護師にとって「積極性」が大切だと考えるようになった。特にそれを感じた場面が、体の不自由な方の食事のお手伝いをさせていただいた時だった。最初は口数も少なく、自分のことで必死になってしまっていたわたしだったが、途中から積極的に話しかけることを心がけた。すると、患者さんにも笑顔が見られ、会話が弾んだ。自分の対応によって患者さんの対応も変わる。このようなところに、看護師の魅力があると感じた。次に、わたしが強く感じたことは、自ら体を動かせない方や言葉を話せない方も「生きている」ということだ。これは当たり前のことだが、こんなに強く考えさせられたことは初めてだった。言葉を話せない方も、痛い・つらいなどの表情がある。きちんと聞かえているのか確認のない方も何らかの反応を示す。会話が成り立たなくても、表情や動作でこちらに意志を示そうとする姿に、大きな感動を覚えた。わたしは、本当の「やさしさ」はここにありと考える。人間同士の関わり合いは「言葉」ではない。お互いの気持ちを読み取ることで、初めて「やさしさ」が生

まれるのではないだろうか。

現在、日本は「超高齢社会」に突入した。高齢化率は約二十三%という高い数値だ。しかし、わたしの住む地域では約二十九%と、日本の高齢化率を大幅に上回った。確かに、近所で小さい子を見かける機会は減り、病院へ行くとはば高齢者であることが多くなった。世間でも言われているように、看護師の役割は変わりつつある。以前は医師と同様にケアで留まっていた役割であったが、高齢者が急増している現在、ケアも看護師に要求される役割となった。そのため、今後はさらに幅の広い視野が必要であると考えられる。

これらの経験から、「看護師になりたい」という気持ちが、確固たる強い意志と変化した。そして、多くの高齢者である患者さんと交流したことで、地域に密着した医療に興味をもった。看護体験の前までは、地域的医療など深く考えたことはなかった。自分のやりたいことを見つけるチャンスとなった。このようなきっかけに出会えただけでも、わたし自身成長できたのではないかと感じる。また、都合が合わず祖父母にさえあまり会わない、幼い子とも触れ合うことのないわたしにとって、看護体験は全てが新鮮だった。高齢者や幼い子に対して、以前のわたしは特に何も考えていなかった。しかし、現在わたしの見る「世界」の見方は大きく変化した。わたしの住む地域は、前と何も変わらない。だが、高齢者や幼い子と触れ合う機会がないというのは、単なるわたしの捉え方でしかなかったのだ。今考えると、機会はずばりさまざまな場面であったはずである。それをわたしは、見落としてきた。最近、今までは感じたことのなかった、高齢者のちよっとしたやさしさや、小さい子の愛らしさを感じるようになった。看護体験を経て、わたしの「世界」は一変した。しかし、これはたった一部だ。わたしの知らない「世界」は、まだまだ果てしなく広がる。わたしは将来、あらゆる「世界」を経験した看護師になりたい。そこには、さらに成長を遂げた、わたしがいるはずだから。